

カレッジOB、現地へ飛び救援活動

東日本大震災から2か月。“私たちができる何かをしよう”と、現地へ飛んでボランティア活動をするグループなど、KSC仲間の動きも活発になってきました。グループわの物資購入募金は、傘下のクラブ、グループの協力で展開されています。4月10日以降、わ本部へ寄せられたものだけでも23件・45万円にのぼっています。オールKSCで何かできないか、との検討もカレッジとグループわで、進んでいます。今回は、現地へ飛んで救援活動をしてきた3グループの報告です。(グループわ・支援チーム)

5人、田のガレキ除去

カレッジ卒業生でつくる「ひょうご食農塾」のメンバーら5人は5月6～8日、宮城県大崎市、登米市、気仙沼市を訪れて救援物資を届け、大津波で荒らされた田んぼの修復作業を手伝ってきました。「強行軍だったけど、少しは役にたてたかなあ」。鍋島隆さん(生10)は満足そうな表情で宮城遠征を振り返ってくれました。あとの4人は、高月瑠子(生7)、嶋谷徹(同)、堅田サチエ(同)、西尾津子(生18)の皆さんです。

一行は自前で購入した日用品・食料・食器・医薬品・文具・玩具・絵本・衣類など1500点近い物資を車3台に満載して6日朝、神戸を出発。片道1000キロの道のりを24時間かけてひた走り(途中で仮眠)、7日朝、大崎市にある「NPO法人田んぼ」(岩淵成紀代表)に



宮城遠征の5人。左端が鍋島さん。右端はNPO田んぼの岩淵さん

到着しました。ここは内陸部で津波の被害はないため、物資はもう少し海よりにある登米市の支援物資配送センターに寄託。

その足で、被害が大きかった気仙沼市に向かい、大谷中学校の学校田で瓦礫の破片を取り除く作業をしました。塩害の除去は終わっているが、瓦礫の破片(特

にガラス)が無数にあり、裸足で田植えをする子供たちが危険だからです。その夜は車の中で1泊。8日早朝に現地を発って戻ってきました。

「NPO法人田んぼ」は生環コース・保田茂先生の紹介で知り、物資も先方から「欲しい物品リストをもらって」揃えました。「秋にはもう一度現地を訪れ、あの田んぼの収穫ぶりを見たい」そうです。(左の写真は、大谷中学前での瓦礫除去作業をするメンバー)



2011年5月18日発行

問い合わせ先 = グループわ・東日本大震災支援チーム(道満・大垣・南形)

743-8101 fax 743-3830 Eメール group_wa_support@wa-net.jp



単独で駆けつけた山男

「テレビで惨状を見ていて、居ても立ってもいられず」単独で釜石まで駆けつけたのは、東窪紀行さん（生9）。山男で体力に自信があったので、3月27日から4月3日まで6日間にわたって、避難所で活動してきました。（写真中央が東窪さん）

東窪さんは単独行に慣れており、テントや1週間分の食料、水20リットルを車に積んで27日に出発。途中、新潟県下で1泊。28日朝、釜石駅近くの「ボランティア受付所」に顔を出しました。「何でもやります」と言ったところ、釜石市立のぞみ病院の避難所を指定されました。100人ほどの炊き出しを市職員とボランティアら6人で担当するのです。メニューは、おにぎり・みそ汁・パンなど。まだ食材は十分でなく、自衛隊から融通してもらうこともありました。3日目からは、物資集積所でガソリン・灯油の仕分け作業をしました。

避難者とじっくり話す時間はなかったようですが、「水没した保育園の子供たちが無事、逃げのびたという話を聞きました。前日に避難訓練をしたそうで、園長さんのお陰と噂になっているようです。唯一、明るい話題でしたね」。

「港町・釜石の光景は無残の一語です。地震というより津波で何もかも無くなってしまった。そこが、阪神大震災と一番違うところですね」と印象を話してくれました。

常盤大チームは炊き出し

グループ わ と協力関係にある神戸常盤大ボランティアセンター（長田区）でも3月26～30日、学生・教職員11人が岩手県釜石市と大槌町を訪れ、避難所で炊き出し（写真）などの活動をしてきました。震災発生から間がなく大混乱の時期でしたが、岩手県立大と交流があり、スムーズに現地入りを果たせたそうです。一行は学園のバスと車に分乗。3000食分の食材（お米・肉類・野菜類）や鍋・水・ガソリン、寝袋などを持ち込みました。指定された避難所では温かい豚汁、雑炊、おにぎりなど1回200食、2日間で1000食を提供しまし

た。「ああ、温かい。おいしい」と大好評だったようですが、子供たちからは「お肉が食べたい」とリクエストがあり、豚汁の肉をいためてメニューに加えたそうです。リーダーの中田康夫准教授は「見渡す限り何も無い。テレビで見るよりもっと酷い惨状に学生たちはショックを受けていました」。「大きい避難所は物資も多く、情報も届きますが、30人程度の小さな所は食料も少なく孤立しているようで、痛々しい感じでした。できればもう一度行きたい」と話しています。



子供たちへの物資購入募金

子供たちに本や文具を贈ろうと、わ本部が4月から実施している「救援物資購入募金」は、5月17日現在、23件・45万円が寄せられています。5月に入り、サークルやクラブに募金箱をお渡しして、イベント会場などで協力を呼びかけてもらうよう、お願いしています。

【わがお預かりした募金 第2次分。4月12～5月17日）おはなし系車5千円、混声合唱団7万2188円、中央区会1万円、兵庫区会5万円、テニスひよこ会2200円、8期生環2万円、KSCOBフニクス7 5333円、手話コア同好会1万4000円、14期うまいもん探訪会7500円、7期食文2万円、13期生環3万962円、学習支援の集い13万7505円、大正琴7リム71万円、増金スミ子3万円、ksc7ジッククラブ1万円、KSC民謡クラブ3万円、里山和楽会5千円、楽遊クラブ銀雅2万円、新舞踊クラブ1万円、西区会有志1万7500円、神戸ピルカ隊2万8045円、森の仲間5476円、カレッジ内募金箱1万312円。

新聞投稿 今こそ立ち上がろう

亡くなった方々、家族や家、すべてを失って途方にくれている方々、どうか信じてほしい。私たちみんながきっと助けることを。おーい、みんな、今こそ立ち上がろう。お金や知恵や労力を少しづつでもみんなを出せばそれは大きな力となる。何よりも大きな励ましとなる。われわれ自身の応援歌にもなる。日本人が強くて優しい民族であることを示そうではないか。被災者の皆さん、悲しみは消えなくても絆を信じて生きてください。

福島雄一（国16）（神戸新聞4月19日付け朝刊。本人の了解を得て掲載しました）

今こそ立ち上がろう

亡くなった方々、家族や家、すべてを失って途方に
くれている方々、どうか信じてほしい。私たちみんな
がきっと助けることを。おーい、みんな、今こそ立ち
上がろう。お金や知恵や労力を少しずつでもみんなで
出せばそれは大きな力となる。何よりも大きな励まし
となる。われわれ自身の応援歌にもなる。日本人が強
くて優しい民族であることを示そうではないか。被災
者の皆さん、悲しみは消えなくても絆を信じて生きて
ください。

(神戸市中央区、

福島雄一、64歳)